

# 北ベトナム紀行

「人民日報」訪越代表団著 / 安部仁・真木晋共訳



VIỆT NAM  
DÂN CHỦ CỘNG HÒA



## 北ベトナム紀行

定価 120 円

---

1964年11月 1 日 第 1 版発行

著 者 「人民日報」訪越代表団著

訳 者 安部仁、真木晋共訳

発 行 者 秋山良子

印 刷 所 光陽印刷株式会社

製 本 所 藤本製本所

発 行 所 鳩の森書房

東京都文京区千駄木町 148

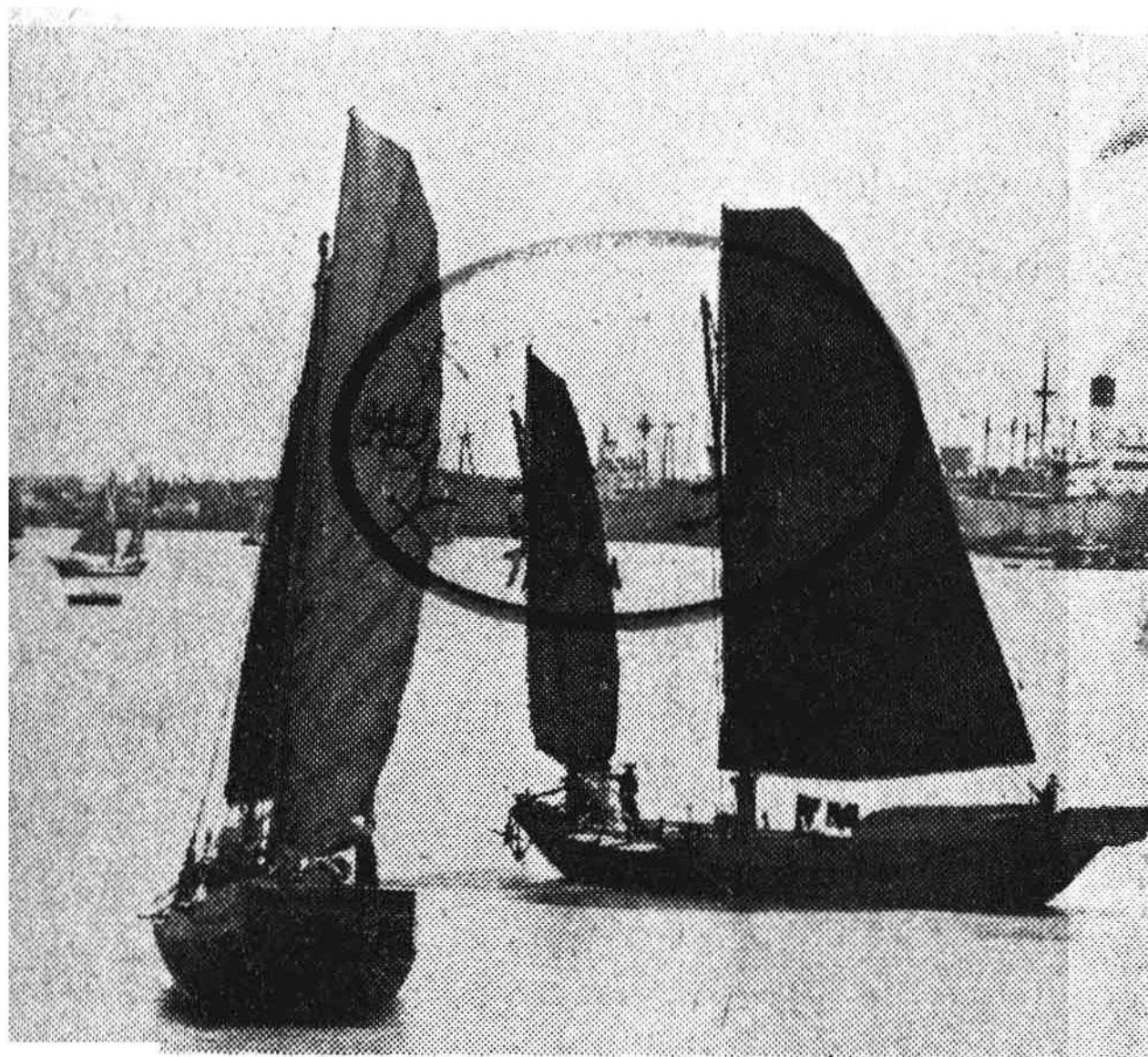
電 話 (828) 5 8 6 1

---

# 北ベトナム紀行

「人民日報」訪越代表団著

安部 仁・真木 晋 共訳



鳩の森書房

目 次

|                   |    |
|-------------------|----|
| 一、とたびの春……………      | 三  |
| 二、南方の戦いの歌……………    | 二七 |
| 三、革命の気風……………      | 四二 |
| 四、礦山のアカハタ……………    | 五七 |
| 五、農村のあたらしい姿……………  | 七二 |
| 六、「みちびき鳥」のうた…………… | 八三 |

# とたびの春



## とたびの春

わが国の北の方ではまだ、白一色の雪がふぶいていたころ、わたしたちはベトナムの「ニヤン・ザン」紙に招かれて、春たけなわの兄弟の国——ベトナムを訪れた。

わたしたちはハノイで中国の習慣によく似たにぎやかな旧正月を楽しくすごし、郊外にあるベトナム・中国友好農業生産協同組合を参観したのち、こちよい春の風になぶられながらハノイ東方の著名な港ハイフオン市とホンガイ炭鉱地帯をたずね、南の海の奇岩つらなるハーロン湾の景勝を楽しんだ。そこで、車を馳って一七度線までいっきに南下し、ヒエンラン橋のたもとで英雄的な南方人民のたたかいの詩編を胸にきざんだ。こんどはみちみちよく知られたおおくの農業協同組合を見学しつつ、あこがれのホー・チミン主席のふるさと、革命発祥の地のひとつゲアン州を訪れ、最後に足を北に伸ばしてベトナムさいしよの鉄鋼の町タイグエンと、さいしよの工業地帯ベトチーをたずねた。

それは、ベトナム人民が一九五四年のジュネーブ協定の調印このかた、祖国の平和な統一がかちとろうとして北方では社会主義の革命と建設をすすめ、南方では民族民主革命をつづけな

がら偉大なたたかいのなかで迎えた一〇度目の春だった。

忘れられぬ春だった。一〇度目の春を迎えたベトナムの人民がみせてくれた、若い息吹きにあふれる草創の絵巻物をわたしたちは忘れられない。

としわかい労働者階級は、みるかげもなくふるばけた四一の工場しかなかった北方に、もうすでに、一〇〇〇の工場をふやしていた。つまり一〇度目の春にはさいしよの春の二四倍あまりになっていた。

北方の三万あまりの農業生産協同組合は、農家の八七パーセントを集団化のひろい道に引きあげていた。勤勉な組合員が一年間に生産した食糧は、フランスが支配していたところの最高の作柄だった一九三九年の生産高にくらべて二倍あまりにふえていた。

フランスが支配していたころには、北方の人びとの一〇〇人に九五人は文盲だったが、いまではもう読めるようにも書けるようになっていた。かつてはインドシナ全体で八〇万人あまりの学童しかいなかったが、今年の春にはベトナム北方の学童数だけで二六〇万人、つまりフランス人がインドシナにつくった学校の生徒数の三倍あまりになっていた。

水に源、木に根ありという。この大いなる数字のかけにも心をゆさぶるいわれがあった。

ベトナムを訪問していた四〇日のあいだには、ベトナム労働党第一書記レ・ズアン同志、中央政治局員ゲン・チタン、ゲン・ジュイチンらの同志がわたしたちに前後してあってくれ

た。これらの人びとも、その他おおぜいの党や政府の各級の責任ある同志たちも、それぞれ十年らしい建設の成果をわたしたちに紹介してくれた。ホンガイ露天堀炭鉱のとしおいた鉱夫も、ハイフオン・セメント工場の労働英雄も、タイグエン鉄鋼コンビナートの技術者も、タイビン州とゲアン州の協同組合の婦人、それに生産隊長も、ゴウゴウとうなる機械のそばや静かな野良の水路のほとりで、みごとに伸びたゴムの木の下で、どんなに苦勞してこの大いなる数字をおりなしていったかということ、わたしたちに語ってくれた。

党や政府の指導者から工場や農村のふつうの労働者までがいちように、頭のさがるような謙遜した態度でじぶんたちの草創の偉業をかたり、草創のみちみちの中国、ベトナム両国のよしみの結晶をここからたたえた。

ここに記録するのは、ベトナム北方の一〇年間の春のいくつかの断片である。

## 咲きはこる自力更生の花びら

自力更生を主としながら、おくれた農業国に経済的な自立をもたらし、社会主義工業化をなしとげ、南方人民の闘争を支援し、祖国の平和統一をかちとることは、ベトナム労働党が戦後



の三年にわたる経済復興と、そのあと三年の社会主義改造につづいてうちだした第一次五ヵ年計画の基本路線であり、北方の広はんな人民がかたときも忘れなかった重要な指導思想のひとつでもある。

社会主義に移行しだした一年目の春が、どんな春だったかということは北方人民のひとりのこらずよく覚えている。北方の地下には石炭や鉄などの鉱物資源が豊富にあった。けれども、フランス植民者の八、九〇年にわたった統治は北方の人民に傷つきはてた山河をのこしたただけだった。フランス植民者はインドシナをはじめからしまいまで安上がりな原料供給の植民地にしてきた。かれらがベトナム北方にすてていったみるかげもない工業のほとんどぜんぶは機械修理工業で、製作工業はひとつもなかった。ほとんどの鉄道と自動車道路の七三パーセントは、対仏抵抗戦争のあいだにひどく破壊されていた。肥沃な土地のほとんどは地主や富農の手に集中していた。農業生産もまた米を主とした単一経済で、経済作物は耕地総面積の一〇パーセントをしめるにすぎなかった。くる年もくる年も南から食糧をもちこんでこなければならなかったし、農民の三分の二はいたって貧しい日々をすごしていた。

こうしたベトナムの具体的な状況にたつて、ベトナム労働党はマルクス・レーニン主義を具体的に応用しながら、幅ひろい大衆をよりどころにして、自力更生と苦難にめげぬ伝統的な革命の精神を発揮するようつよく訴え、どうじに兄弟国の援助をただしく活用して、北方の社会

主義革命と建設を力づよくおしすすめてきた。

この一〇年のあいだに、ベトナム北方の国民経済は三つの発展段階をたどった。一九五五年から一九五七年にかけては経済復興の時期をたどり、一九五八年から一九六〇年にかけては国民経済の改造および発展のための三ヵ年計画をやりとげ、農業、手工業、資本主義工商業の社会主義改造をすすめた。そして、一九六一年から国民経済の発展段階がはじまった。ベトナム労働党の第三回大会は第一次五ヵ年計画をとりあげ、「社会主義のための物質的、技術的な基盤をいちおうつくり、社会主義工業化をひとまずはたし、社会主義改造をおわらせ、北方をひきつづき社会主義の道にそって、早く、力いっぱい、着実にあゆませるため奮闘しよう」とたたかいの目標をうちだした。

一年目の春このかた、ひとつまたひとつと空高くつたつ煙突、ひとつまたひとつと軒を並べるざん新な工場が、広はん大衆の勤勉なもろてをつうじて原野に出現しなかった春は一度もなかった。

わたしたちは竹の林のさとかから鉄鋼のさとかに変わったタイグエンをみてきた。

わたしたちはフランス軍の基地から工業の基地に変わったベトチーをみてきた。

むかしはひとつもなかった機械製作工業、冶金工業、化学工業などの新しい工業部門がひとつひとつ建設された。

ハノイ、ハイフオン、タイグエン、ベトチー、クアンニン、ゲアンなどの新しい工業都市が  
いま、ひとつひとつ発展をとげている。

近代工業の生産額が工業総生産額にしめる比率は一九五四年の五パーセントから一九六三年  
の五五パーセントにふえた。これほどの成長テンポは社会主義陣営のなかでもめずらしいこと  
だ。

一年目の春このかた、北方の工場や鉱山、港、町や村で、自力更生のおびただしい花が咲き  
におわなかった春は一度もなかった。

大量の機械や車両の部品の不足は、ひところ、いろんな工業部門にとっていちばん頭痛のタ  
ネの大問題だった。これらの機械や車両はもともとあちこちの国から輸入したものだとし、  
かつては部品も輸入していた。それが二、三年まえから一部の国がとつぜん部品の供給を停止  
しだした。国内ではすぐさまくめんのつくはずもなく、いちじは重大な運転停止や生産停止の  
現象がおこった。

ホンゲイ炭鉱では、トラックの四〇パーセントが部品の不足で動かなくなったが、この難題  
の解決はホンゲイ機械工場にまかされた。ホンゲイ全山の四、五〇〇台のトラックを正常に走  
らせるよう保証しなければならなくなった。ところが、機械工場の労働者たちはこんないろ  
んな型のまじった、質的にもうるさく要請される部品をつくったことは、いまだかつて一度も



なかった。おまけにトラックのピストンやシリンダーはよく壊われたし、一台あたりに六つのシリンダーがあるとして一ヵ月に一四、五台の修理をしなければならなかったのだから、だれにも自信はもてなかった。

どうしたらいいだろうか？ 労働者たちは党の第七回、第八回中央委総会の決議をしんげんに学習して、ムダをはぶいて自力更生で祖国の建設にとりくむのだという思想を胸にしっかりときざみこんだ。フランスに抵抗した忘れえぬたたかいのさなかにも、あの長い苦難にみちた道のりのなかで、ベトナム人民は棍棒ややり、手製の鉄砲をたよりに敵をたたき、たたかうほどに強くなって、そのつど勝利してきた。それがどうして、社会主義建設の一時的な苦しさのまえに頭を下げよう！ めいめいがじぶんの手で部品をつくることを誓った。機械の修理工たちが昼も夜もねじりはちまきで研究し、試作をつづけて、ついに部品のはほとんどをじぶんたちの二本の腕でつくりあげた。

こうした事態と結末は、北方ぜんたいの工業、交通部門にもみられた。

ベトナム人民は自力更生と外国の援助への依存とのあいだの関係を全般的に、ただしく理解していた。ハイフォン・セメント工場の労働英雄グエン・ヴァンファンさんは、わたしたちにとってみれば兄弟国の援助がいたって重要な意義をもつのはいうまでもありませんが、より肝心なのはわたしたちじしんが知恵をしぼり、からだを動かすことです、とその体験を教えてく

れた。グエンさんはじぶんの実践によってその体験を裏づけている。貧農そだちのこの労働者は党に育てられて独自の才能をみせ、たいへんな価値をもついくつかの技術改革を考えだして、それをなしとげた。グエンさんは仲間たちから「意志の人」、「冷静な人」、「考える人」という尊称をもらった。だがもうひとついうなら、自力更生の精神をただしく身につけた人というべきであるだろう。

人的な要素はあらゆる要素のうちでもいちばん大切な要素である。外的な要因は内的な要因をつうじてのみ作用する。国際的な援助はその国内部の主観的な努力をつうじてのみ効果をあげる。いく干いく万のホンゲイ機械工場タイプの人びと、いく干いく万のグエン・バンヒエンさんタイプの人びとをよりどころにしてのみ、くる春もくる春も、より多くのより鮮かな自力更生の花を咲かせて、ベトナム北方の社会主義建設をたえず新しいピークに追いやることのできたのだった。

## 技術陣のおどろくべき成長

北方ではいま、たがいにつよく関連しあった三つの革命、すなわち生産関係の革命と技術革

命、それに思想および文化革命がすすめられている。

技術革命をなしとげるためには強力な技術部隊が確立されねばならない。それはまた、第一次五ヵ年計画をやりとげ、経済の自立をもたらし大切な保証でもある。

さらにまた、それは自力更生の精神を具体的に身につけたことをしめす大切な側面のひとつでもある。

ベトナムを訪問していた全期間をつうじて、わたしたちはいたるところでこの技術部隊がどれほどのスピードで成長していることを耳にしてきたし、それをみてきた。

「おどろくほどのスピード」というのは、けっしてきまり文句のつもりではない。つぎのような背景からも、スピードへのさしせまった要請があったことは納得できよう。

フランスがインドシナを支配していた末期には、インドシナのぜんぶをあわせても、おもに植民地的農林資源（たとえばゴムやコーヒーなどがそれである）の生産にあたっていたたった数百人の技術者がいただけだった。工業技術者はほんのわずかしかなかったし、ホンゲイ炭鉱やハイフォン・セメント工場にいた少数のフランス人技師も、ジュネーブ協定が調印されるとぜんぶ引き揚げてしまった。フランスの植民者たちは出発のせとぎわに、ベトナム人民にはこれらの工場や鉱山の生産を復活させる能力がないと断言したものだ。

ベトナム労働党と政府は、のっけからぶつかったこの大問題につよい明確な方針をうちだ

し、技術者と技術労働者の隊列の確立をはやめることをきめた。そのやり方としてはまず中初等技術学校や、夜学、講習会をひらいていくかたわら、職場でじっさいにやらせて中級および初級の技術者や技術工を重点的に養成し、経済復興期のさしせまった要請にこたえた。一九五八年からの三ヵ年計画が始まると、こんどは高級技術学校の設置に力をいれて技師などの高級技術陣をそだて、それとどおじに中級技術学校もよくしていった。

工場や鉱山でいちばんよくとられて、ききめのあった養成の形式は講習会をひらくことだった。

タイグエン鉄鋼コンビナートはこの点でとくにめざましい成果をあげた。ここではコンビナート、の建設をすすめるかたわら生産もはじめ、そのいっぽうではいろんな技術講習会をひらいて、職長や建築工、建築と冶金業務の管理要員、高炉工、それに電気機械、電力、計器、設計、大型施工機械の技術陣といったようなかなり高級な技術者を訓練していった。こうやって一九六〇年の建設がはじまってから六〇〇〇人の技術陣をそだてあげて、コンビナートの発展に技術的な土台をつくったばかりでなく、全国にも鉄鋼および建築技術人材をまわせるようになった。

技術者の隊列をつくりあげるといふことはけっして、そんなにやさしいことではなかった。多くのかなり高度な技術訓練が労働者の教育程度と矛盾しあったうえに、労働者の政治的なレ



ベルとも矛盾しあった。たとえば、電力調整の人材をそだてるのには高校程度の教育がなければならなかったが、このコンビナートの労働者たちのなかからえらびだしえた最高のレベルは高等小学校の二年クラスだった。こうした矛盾をまえにして、コンビナートの労働者たちはねばりにねばってたじろがぬ革命の気構えをみせ、技術をまなぶかたわら一般的な勉強もして、この関所を突破することを決意した。これとともに、コンビナートの指導部では、教育程度のもっともひくい労働者のためにはだんだんと前進させるだんどりをとって、専門の技術訓練にはいるまえに文化学習をやらせて数学をおしえた。三年のあいだに、労働者の七〇パーセントが小学校から高校までの文化補修班にはいった。

コンビナートの電気熔接工グエン・ヴァンチーさんは技術学習のときの思い出話をこんなぐあいにしゃべってくれた。

電気熔接班ができたとき、ここには六〇数人の農民出身の復員兵士がまわされてきた。銃を手にして敵をやっつけることなら、しぶとく勇敢なつわものたちのめんめんも、さて熔接機にちなおして鋼板を熔接するだんになってみるとまごついた。講習会のさいしよの授業は電気熔接の原理だったが、講義をきいてもさっぱりのみこめないし、熔接機や熔接棒のもち方さえも専門家に手をとっておしえてもらわなければならぬ仕末だった。なかには気をくさらし、村に帰って田んぼをすいていたほうがなんぼかましだと思ふものもいた。

細胞の班會議で、復員したら人民軍の革命的な伝統を忘れずに、戦場で敵をやっつけたときとおなじ気持であらゆる困難をのりきらなければいけないし、それに、生産建設の成果をあげて南方人民の闘争を支援するんだといわれた部隊の指導者たちのおしえをみんなでかみしめてみた。いちどでもこうやって話しあってみると、技術をせめてせめ抜く力がみんなに湧いてきた。

熔接工たちはまたたく間に普通の熔接技術をのみこんでしまったばかりか、たえず合理化提案をだしあいながら技術を改善していった。一九六二年に「血肉をわけた南のため」の一ヵ月間の生産競争がやられたときには、一交代単位のひとりあたりの熔接量が二メートルから六・四メートルに伸びた。記録をだした仕事には、みんなから「米・ゴ焼」という名前がつけられた。

北方ゼンたいの技術陣の成長テンポは、中級の技術者が一九六三年には一九五七年（経済復興期のさいごの一年）にくらべて一七倍にふえ、高級技術者はおなじく一二倍にふえたという数字がそれを説明してくれるだろう。いろんな講習会をおして現場仕込みでそだてられたり、職業学校で養成された技術工の隊列も、ひじょうに急速な発展をとげている。